

<http://outdoor.geocities.jp/tokinosunomori>

E-mail : tokinosunomori@yahoo.co.jp

<連絡先> 掛川市中宿 1 1 3 (TEL・FAX 0537-23-0412) 「森の駅 時ノ寿」(TEL 0537-28-0082)

<もくじ>

- ★ごあいさつ 1
- ★12/25「納会」開催案内（出席の方はお返事ください!） 2
- ★「時ノ寿の森クラブ」案内パンフレットでPR 2
- ★国際ワークキャンプ開催案内 3
- ★近況報告（時ノ寿ホームページ・ブログより）
 - 充実の定例活動（9月18日） 3
 - 川内村へ木炭を送る（9月19日） 4
 - 窯焚き（10月3日） 5
 - 誰でもできる森林保全（10月10日） 5
 - 自信を持って日本（10月27日） 6
 - 森は自分である（10月30日） 7
 - 雨の森に若者の熱気が（11月6日） 8
 - 山の資源で地域活性化（11月8日） 8
 - 今こそ見直そう国産（11月13日） 9
 - 残材で地域を活性化（11月14日） 10
 - 津波を防ぐ緑の防潮堤（12月2日） 10
 - 優れた薪ボイラー（12月3日） 11
 - 小水力発電（12月5日） 12
 - 自然が資源（12月15日） 13
- ★10/10 開催「国際森林年記念シンポジウム」収録新聞記事 別紙
- ★NPO 法人時ノ寿の森クラブ案内パンフレット 別紙
- ★新年 1 月～3 月活動予定表（新年早々に発送します。）

<ごあいさつ>

今年も、あと 2 週間となりました。1 年間、クラブ活動にご理解ご協力をいただきありがとうございました。荒廃した森森が、一歩ずつ明るく、豊かな状態に再生されていることが、時ノ寿の森に行くたびに実感いたします。会員の皆様も、師走を迎えてあわただしい中でも、今年 1 年を振り返っておられることと存じます。最近のテレビや新聞を見るたびに、3 月 11 日東日本を襲った巨大地震の驚異に体が震え、またその犠牲に

なられた多くの被災者の皆様のご心痛とご苦勞に心を痛めております。また、9月の台風により発生した巨大な土石流の映像を見ながら、これからますます拡大する異常気象に将来を案じてまいります。

先日は、今年の世相を表現する漢字が「絆」に選ばれ、清水寺の森貫主が、清水の舞台で大きな和紙に書かれたあと「みんなが一つの心になって日本を力づけてほしい」と話されました。大地震、大津波、原発事故、放射能汚染、大洪水、TPP、就職氷河期、倒産、解雇、現代うつ病などなど、日本各地を覆う世相を一掃するために、家庭・地域・会社・組織において、お互いが希望の絆でつながり、前進して行きたいものです。

わがクラブも、NPO法人として丸2年になろうとしています。この森林再生活動を社会運動として広げて行くため、今後は、源流部の森林再生活動を「山から海まで」つなげて行くことに、創意・工夫が必要だと思っています。そのためにも、まずは会員の皆様が、豊かな森を未来の子どもたちに引き継ぐことをめざし、ますます希望の絆で強く結ばれ、一つにならなければいけません。そのことを大切にされたクラブ運営に、一層の努力をしてまいりますので、来年もご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

12月25日の納会にご参加ください！

～1年を振り返り、来年に備えるため

森の駅の清掃、機械器具の点検、慰勞の昼食会を行います～

今年最後の活動です。大掃除のあとで、楽しい昼食会をしたいと思います。ご家族も一緒に大勢のご参加をお待ちしています。準備の都合がありますので、参加出来る方は23日(金)までに参加人数を電話又はメールでご連絡ください。

日 時 平成23年12月25日(日) 9:00～14:00
場 所 森の駅時ノ寿
昼 食 クラブで用意します。参加費無料。

*昼食の時、足元が冷えるかもしれませんので、気になる方は厚手の靴下又はスリッパ等をお持ちください。

時ノ寿の森クラブを周囲の方にご紹介ください！

◆◆ 未来の子どもたちに豊かな森林を引き継ぐために ◆◆

時ノ寿の森クラブは、森で汗を流す人・遠くから応援する人・森林の恵みを利用する人などなど、森づくりへの多様な関わり方ができるクラブです。日本の国土の7割が森林ですが、森林は様々な命が生まれ育まれる「いのちの源泉」と言われています。荒廃する森林を再生し、豊かな環境を未来へ贈るために、多くの方々のご参加が必要です。「国

際森林年記念シンポジウム～誰もが参加できる森林保全～」を収録した新聞記事を同封しましたので、ご覧ください。そして、同封のクラブ案内パンフレットにより、周囲の方々にご紹介いただければ幸いです。

国際ワークキャンプ・掛川 2012 開催！

～ 世界中のボランティアが時ノ寿の森に集まり、森林を再生する ～

国際ワークキャンプとは、世界中のボランティアが2～3週間共に暮らし、地域住民と環境や福祉などに取り組む国際協力事業です。このたび、特定非営利活動法人NICE（日本国際ワークキャンプセンター）と連携し、時ノ寿の森で国際ワークキャンプ・掛川2012を開催することになりました。森林再生活動に、若い地球色のボランティア・パワーが加わります。クラブ会員や地域住民とボランティアが、活動を通じて友情・相互理解・連帯感が深まり、時ノ寿の森クラブのファンが増え、さらには地域活性化したらいいな、と思っています。ぜひ、多くのクラブ会員のご参加を期待しています。

開催期間 平成24年2月26日（日）～3月11日（日）2週間

開催場所 時ノ寿の森、大沢川沿線

内 容 森林の間伐作業、谷川を覆っている雑木・竹林を除伐
座談会、交流会、市内観光など

<近況報告> （時ノ寿ホームページ・ブログより）

2011年9月18日（日） 充実の定例活動日

9月第三日曜日の今日、時ノ寿の森も厳しい残暑でしたが、定例活動日にクラブ員7名が朝から森に集まってくれました。さらに本日は、ワタミ株式会社の環境マネジメントグループのKさんが、わざわざ埼玉から参加くださいました。Kさんとは、4月の植樹祭で初めてお会いして以来でしたが、わがクラブの活動に興味を持ってくださってのご参加ということで、時ノ寿の森クラブ



にとっては凄いことで、この上ない喜びです。以前、ワタミ会長の渡辺さんの若者を捉える居酒屋文化の哲学を読んで惚れてしまいましたが、そのワタミさんが社を上げて

取り組んでいる環境マネジメントのリーダーが、時ノ寿の森クラブの活動に参加くださったのですから……。また、今日はその他に、NPO法人掛川シニア交流研究会・出会い塾の市民28名が見学に来られました。

9月は、わがクラブが創設してから満5年となります。このように日本を代表する外食産業のトップ企業、また市民団体の皆様が、わざわざ山間地まで訪問して下さったことは、感慨もひとしですが、ここまで活動を支えて来てくれたクラブ員の皆様に心から感謝を申し上げたいと思います。

今日の活動は、間伐材を焼いた木炭を消臭・吸湿剤として世の中に普及をめざす一環で、放射能汚染に苦しんでいる福島県川内村に利用いただければと寄贈するための木炭梱包作業が、その一つ。また、来週に窯焚きを行う時ノ寿窯の作品窯詰め作業も行いました。さらに、時ノ寿窯の煙突上空に覆いかぶさっているコナラの太い枝を切り落とす作業も行いました。

Kさんにも、見学の市民にも話したのですが、今や森林の大切さは、世の中誰も否定しませんが、その保全活動にまず身近なことから参加してみるという人は、極少数であるのが現実です。多くの社会活動の中で、森林再生に賛同をいただくためには、私たちクラブが地道に実績を上げていくことが第一ですが、私たちの活動を社会に発信するとともに、支援や連携を求めて企業や市民団体に啓蒙する活動も重要であるということ、痛感しています。

そのような課題を念頭に置くことは大切ですが、クラブ員がいつまでも夢と希望を持って時ノ寿に集まってくれるようなクラブ運営をモットーにしていきたいと思います。

2011年9月19日(月) 川内村へ木炭を贈る

東京電力福島第一原発事故による放射能汚染で、福島県各自治体の住民は強制的にふるさとから避難させられている。わがクラブとも「いのちの森づくり」を通じて関係のある川内村も、村民全員が村の外で避難生活をされている。住民のみなさんは、放置してきた田畑や牛や馬などの家畜が心配でたまらないだろう。一日でも早く、川内村に復帰させて上げたい。政府は、放射能汚染の数量が小さい自治体については、9月中にも警戒区域を解除し、自治体による区域内の放射能除染作業を推進させ、その結果が良好であれば住民をふるさとへ復帰させる方針のようだ。



私たち時ノ寿の森クラブとしては、川内村の復興のために何か支援させてもらいたいと思っていたが、来週25日日曜日に村復興を祈念して「いのちの森植樹」開催するそうである。わがクラブとしては、植樹の支援のほか村民の住まい環境改善に木炭を利用してもらおうと、消臭・除湿効果の高いスギ・ヒノキ間伐材木炭を持って行こうと思う。昨日の定例活動で梱包作業をしたところ、一袋約5kg入りが50袋出来上がった。

放射能汚染区域の環境保全のために、木炭が威力を発揮してくれないかと、密かに期待している。

2011年10月3日(月) 窯焚き

このクラブは、重労働な森林保全活動のほかに事業はないのかと思われてしまいそうな昨今のブログ内容でしたが、本日のブログに掲載している写真は、180度趣を変えました。真っ暗な森の一角で、オレンジ色に輝く陶芸窯は、実に神秘的です。時ノ寿の森に出来上がった森と共生する時ノ寿窯の初窯に、一昨日早朝に火が入りました。昨秋から1年かけて時ノ寿窯プロジェクトが進められ



てきました。徳川理事夫妻のけん引力に、加藤・天野・清水健会員が真摯にもくもくと準備を進めてきてくれました。みなさんご苦労様でした。

1日目は最高で700℃程度で窯は焚かれていましたが、2日目の早朝には1000℃に達し、昼前には一気に1250℃まで上昇して初窯は大成功に終わりました。参加した十数人の会員たちも、初めての陶芸窯の魅力に眠気を忘れてしまったようでした。来週10日(月・祝)に窯出しが行われます。時ノ寿焼が誕生する瞬間です。どうぞみなさん、時ノ寿へお集まりください。

2011年10月10日(月) 誰でもできる森林保全

10月10日体育の日。各地で多様な催事があったことでしょう。東京青山では、誰でもできる森林保全をテーマにした国際森林年記念シンポジウムが開催されました。現代社会における森林の機能はますます高まる一方、世界第3位の森林国ニッポンの森林は、人工林を中心に荒れ果てています。この現状は、国をはじめ報道機関によって国民のみなさんに情報発信されていますが、都会に生活されている多くの方々が、この社会問題に真摯なお気持ちを持っていただいたとき、どうすれば気持ちを行動に移せるのか……。そんな思いを持ってくださっている方に、森林保全の現場から生の情報が発信できれば

と願って、参加して参りました。

素晴らしい会場での、素晴らしいプログラムによって森林保全の大切さと、そのアクションのきっかけを都会の皆様提供するシンポジウムを計画実施された毎日新聞社、農林水産省に心から敬意と感謝を申し上げます。このような機会に、地方で泥臭く森林保全を実践しているNPO団体を取り上げてくださったことに感激しています。昨日会場にお越しいただいた参加者の皆様からの熱い視線を、今後の活動の支えにしてまいりたいと思います。

改めて、日頃の時ノ寿の森クラブ員の皆様の御苦労に感謝いたします。今後も夢を描きながら、未来の子どもたちのために命を育む森林を守っていきましょう。

写真は、シンポジウムが開催されたウ・タント国際会議場のある国連大学です。



2011年10月27日(木) 自信を持って日本

政治も経済も、今や日本の存在感が世界各国から薄れようとしている。経済的に正常ではない超円高、またTPP参加を巡って二分するような国民感情など、国民は何を頼りに生きて行っているのか不安な状況が進展している。

コスト・コストの大合唱の産業界の中で、日本流のものづくりが忘れ去られているように思えてならない。そんな中で、世界の優



秀な企業家たちは、かつて栄えたニッポン企業の「カイゼン」思想を真剣に学び、自社に取り入れて成功を収めているようだ。一例であるが、米国のA社の社長は「会社経営で一番大切にしているのは、従業員を育てる文化です。上司が決めてやらせるのでは育ちません。社員一人一人が考えて実行することを大切にしています。」と言っていた。

このように、かつて栄えた日本の企業文化は、国際化と言われる今日的な社会経済の中でも、十分に通用するのである。人間を尊重した日本企業文化に、あらためて誇りを感じる一方、今は一体どうなってしまったのだと残念に思うことばかりである。優秀な日本企業文化の典型的な会社が、岐阜県にある株式会社未来工業である。

15年ほど前になるが、民間企業家たちで作っていた「やる気塾」に通っていたときに、視察に行ったのが未来工業であった。そのときの感動と抱いた印象は、今も新鮮に覚えている。先日、同社の社長さんがテレビ番組に登場していたが、今でも衰えることなく日本流企業文化が、未来工業にはしっかりと息づいていることが、映像から感じられた。

「人間はやりたい事をやらせることで、喜びが生まれるのです。当社では、ハウレンソウ（報告・連絡・相談）は禁止で、常に考えるの精神です。なぜなら、自分で考えて行動しなければ能率も上がらないし、目標も達成できません。」とは、同社社長の言葉である。

また、この会社の労働時間は日本一短く、1日7時間15分で、年間休日は140日もあり、残業はなし。さらに、給料水準は岐阜県平均を大きく上回っていて、創業46年間一度も赤字を出したことがないというのである。

最後におっしゃった「お金をもらったら頑張らないと悪いと思うのが人間ではないですか。」との社長の言葉が、すべてをもの語っていると思った。日本企業よ！目先に惑わされることなく、自国の人間を大切にしたい経営をして行こうではなか！そして、自国の人々の消費を上げて行こうではないか！

2011年10月30日(日) 森は自分である

昨日、国際森林年記念「国民参加の森林づくり」シンポジウムが、静岡県立小笠山総合運動公園エコパ・サブアリーナで開催され、養老孟司さんが「復興と森林～森から始める日本再生」と題して基調講演をされた。環境と自分をつなぐ哲学的な話は、森の再生活動に汗する者に自信と希望を湧かせてくれた。

21世紀はエネルギーと水をテーマに、世界中でいろいろな事が起こると言われた。日本の江戸時代は3000万人くら

いの人口で、人を大切にしたい社会経済であったので、当時の消費エネルギーを1とすると現代社会の消費エネルギーは40倍だそう。石油の無くなるのは、もはや時間の問題なのだから、大事な資源である日本の山を健全にしておくということを、今こそ国民の常識にしておく必要があるとおっしゃっていた。

そして、脳の医学者の視点から、今日「環境」という言葉が国内外で全人的に認知されているが、環境とは自分であるという考え方をしなければいけない・・・と。田んぼも、大気も、人間が生きていく上に無くてはならないのだから自分なのである・・・と。今、人間社会では生存競争が強くなっているが、生物学的には生存競争はなくて、生物



は依存が基本だ・・・と。このような考え方に立つと、大気や水を守る森は自分なのだ、と私は理解した。

2011年11月6日(日) 雨の森に若者の熱気が

あいにくの雨模様であったが、ワタミフードサービス株式会社の社員のみなさんが朝から時ノ寿の森に応援に来て下さった。同会社では、会社自身が吐き出している二酸化炭素を憂い、それを吸ってくれる森林保全に2006年から社を挙げて取り組んでいるそうだが、ワタミさんとしては5000haの森林保全をめざしているという。千葉県には、ワタミの森があり、関東一円の社員さんたちはこの森に行って保全活動をするのだそうだ。



しかし、神奈川から名古屋までの各店舗の社員さんたちは、森林保全活動をする場所がなく、適当な場所を探していたとのことである。そういう意味から、わが時ノ寿の森クラブの活動が本物であれば、会社として活動に参加して行きたいと言って下さった。とても嬉しいことである。わがクラブとしては、森林保全活動を息の長い活動として発展させていくためには、社会の企業との連携が大変重要であると思っていた。ワタミさんは、非常に立派な理念のもとで社を挙げて取り組まれており、これから連携させていただけるならば、これほど素晴らしいことはない。

今日は、雨の中をわがクラブ員たちと一緒に木炭原木づくりを行った。軽トラックでの運搬作業、薪割り機を使用しての薪割り作業、チェーンソーを使用しての玉伐り作業など、初めの体験という方が圧倒的であったが、みなさんの一生懸命な姿勢に感動してしまった。さすが、ワタミ社員さんたちだとあらためて感心もした。午後までかかってしまう予定も、社員さんたちとわがクラブ員との関係プレーの良さにより、お昼過ぎには作業が終了した。ずぶぬれになった体を薪ストーブで温めながらの昼食交流会は、互いにとても有意義な会話ができて良かった。わがクラブとワタミさんのいろいろなコラボレーションを模索して行きたい。ぜひよろしく。

みなさん、本当にお疲れさまでした。

2011年11月8日(火) 山の資源で地域活性化

7日静岡市で開催された「しずおか森林フォーラム ～森の健康診断と森林資源の活用～」に参加した。ここでも、素晴らしい方との出会いがあった。一人は里地ネットワー

ク事務局長の竹田純一氏で、もう一人は矢作川水系森林ボランティア協議会代表の丹羽健二氏である。お二人とも、里地や山間地の固有の資源を、地域の人々が主体になって活用するシステムづくりのプロである。お二人の話を聞きながら、わが時ノ寿の森や掛川市倉真地域の里地を拠点にして、すぐにやってみたい事業が二つ三つ浮かんできた。具体的な内容までは企業秘密のため、まだここでは言えないが、一つは来春までに社会実験しようと思う。



今、環太平洋を巡る米国主導の自由貿易圏づくり（TPP）

の議論がAPEC開幕を目前に国内外で熱気を帯びている。日本も、十分な国民的議論のないまま、最終段階になって国を二分するような動きが際立っている。

資源の少ない我が国の今があるのは、世界を相手にあらゆる面において貿易を成り立たせてきたからに違いない。しかし、小さな国土であるが、その国土に豊かに蓄積された資源に目を向け、その資源を地域の人々の活力で社会に生かすことは、海外を相手に貿易することと勝るとも劣らないだけの重要な経済対策ではないかと思うが、違うだろうか。

2011年11月13日(日) 今こそ見直そう国産

TPP交渉参加が決定し、これから農産物を中心にコストの安い海外産が国内に出回ってくることだろう。国内の農業者にとっては、非常に厳しい環境下に置かれるのは必至である。消費者は、自らが欲するものが安くて手に入ることは恩恵なのかもしれないが、国内で安全に良質に、真心込めて生産した農産物に目を向け、その価格がその農産物の価値以上なのかどうかを、今こそしっかりと見極める必要があると思う。



すでに半世紀近くも前になる昭和39年に、木材輸入は全面自由化となった。それ以降、乱伐された海外材が、次から次に国内に入ってきて、今でもその状況は続いている。その結果、木材自給率は22%程度にまで落ちてしまっているのである。

貿易立国としてT P P交渉に参加していく以上は、木材の二の舞になるような農産物が出ないよう、外交においても国内農業政策においても国策を誤らないように願いたい。

2011年11月14日(月) 残材で地域を活性化

新幹線駅まで車でたった20分程度という地域が、わがクラブの森林保全活動拠点である静岡県掛川市倉真地域だ。しかし、この立地条件が、平均1ha内外の小規模林地が大半の中山間地の人々の意識を森林から遠ざけてしまったと言ってもいい。



だが、この地域は、かつて二宮尊徳の報徳運動が教育及び治山の分野で大いに活発に展開した。したがって、今でもこの地域には倉真報徳社があり、細々だが報徳思想が現代に受け継がれている。

このような変遷を経て、森林が衰退してしまっているが、可能性は十分にあると思っている。原発事故以来、新エネルギーへの住民意識は非常に高まっている。そして、T P P参加という時代の節目にあって、まさに資源小国の日本国民は、今こそ国産の物や資源に対して真剣に目を向けなければいけない時である。

地域住民が、自らの力で参加できる地域の森林に切り捨てられている残材を集めて地域通貨と交換してもらい、その地域通貨を地元商店で使用する。人々は、思ってもみない福の財だから貯めておくよりも、その日の晩酌や夕飯に使って楽しむという。これこそ、報徳思想ではないかと思う。

この仕組みを実験したいと思って、今夜作戦会議を地域住民の有志を集めて開催した。アドバイザーには、はるばる鳥取県から丹羽健司氏をお招きし、岐阜県や鳥取県での先進事例を紹介してもらった。初めは冷めた目で聞いていた参加者たちだったが、終了時には「この地区でもやってみなけりゃ、いいものか悪いものか、分からんじゃないか」と一人が言った。他の者の顔色も、最初の顔色とは全然違っていた。もう、この言葉だけで、今夜の作戦会議は大成功。

2011年12月2日(金) 津波を防ぐ緑の防潮堤

掛川市には、東日本大震災で大津波に被災した三陸沿岸と類似した海岸が、遠州灘に沿って30kmも伸びている。明後日、4日は掛川市全域で地域防災訓練が行われるが、掛川市にとって最大の課題は、津波から住民の命をいかにして守るかということに尽きる。

予想されるM9クラスの東海地震が起きると、沿岸には5～10分間という短時間のうちに、10mもの高さの津波が押し寄せて来るといのである。行政は、緊急対策として本年度から4カ年計画で、47億円余の巨費をかけた地震津波対策が講じられるが、これだけの巨費を投じて、この対策だけで沿岸住民を津波から守ることは到底できない。行政では、「津波からいのちを守るには、まず地震が起きたら1人1人が一目散に高台に逃げる」と啓蒙している。



このことから、予想される東海地震の大津波対策としては、いかにして津波から逃げるための時間を稼ぐかということであると思う。私たち時ノ寿んの森クラブは、山から海につながるいのちの森づくりを理念の一つにしている。よって、発足5周年の節目として、そして森林保全活動のさらなる発展を祈念し、来年度は掛川市民を津波から守るために、「緑の防潮堤プロジェクト」を事業化したいと考えている。事業の詳細は、今後具体化され次第発表するが、市民・企業・行政が一体となった新しい公共によるモデル事業としたいので、多くの方の参加をお願いしたい。

写真は、掛川市の沿岸地域にある先人が残した砂防林だが、松くい虫で枯れ果ててしまっている松林だ。この松林を、津波にも倒れることのないシイ・カシ・タブノキなどの照葉樹林の森にすれば、必ず津波のエネルギーを抑えてくるに違いない。

2011年12月3日(土) 優れもの薪ボイラー

我が国の木質バイオマスの利用は、西欧諸国とは比較にならないほど低い。深刻な福島第一原発事故から、国民の節電意識は高まっているが、地球上の石油の枯渇は目前に迫り、石油を燃料とする自動車は、ここ数年のうちに一気に燃料は電気に代わるだろう。先日行われた東京モーターショーが、そのことをうかがわせている。このように、石油をエネルギーとする現代文化は、急速にエネルギーを電気に代えていくことを考えると、私たちの生活の中からエネルギー源を電気から他の自然エネルギーに代えていくことが大変重要であると思う。



その視点からも、我が国の国土の70%を占める豊富に蓄積されている森林資源を、熱エネルギーとして利用することは、雇用創出や国土保全なども期待される一挙二得三徳のエネルギー政策であると思う。

私たち時ノ寿の森クラブは、地域の森林に切り捨てられている間伐材を、地域住民と一体となり社会事業として集材しようとしている。今のところ、その間伐材の利用先は隣町の製紙会社のパルプ用チップを考えているが、地域内で熱源の薪として利用されれば、地産地消の一番有効な利用である。

今日は、そのプロジェクトを研究するため、薪ボイラーの先進地を視察してきたが、薪の燃焼エネルギーが驚くほどロスなく水に伝わり、給湯や床暖房に利用されているのである。そして、岐阜県、長野県、山梨県では、その木質バイオマスの普及に関して行政が支援をしているということを知った。

視察した薪ボイラーは、今後の自然エネルギーとしての発展に大いに可能性を秘めている。そして、後発の理として、一気に普及するチャンスであると確信した。

2011年12月5日(月) 小水力発電

山村の暮らしは、基本的に自給自足だ。そして、大半の生活用具は知恵と工夫を凝らして自分で作る。かつて、時ノ寿の森のある大沢集落で暮らしていたころのおやじの姿が思い出される。電気以外は、水も暖房も、そして煮焚きや風呂の燃料もすべて自分の力で調達した薪である。今、その時ノ寿の森で、かつての山村文化を見直し、水と木を使って生活に必要なエネルギーを生み出そうと挑戦している。

すでに、暖房は薪ストーブ、風呂も薪の直焚き、そして上水道は谷川の伏流水を自然落差で引いている。しかし、電気だけは1ワットもまだ自家発電できていない。数年前から、川の水力を利用して小さな水車を回して発電したいと思っていたが、先日薪ボイラーの視察で訪れた「豊田市里山くらし体験館・すげの里」では、それを実現させていた。この地は、時ノ寿のように人家が7軒の山村集落で、体験館脇を流れている沢の水を生かして、最大発電量5Wの小水力発電機が回っていた。交流電気が発生し、チカチカと電球が光っていた。素晴らしい物を見ることができたと、感動してしまった。



その発電装置を作ったという集落住民にもお会いできたので、今度時ノ寿に設置した

いとお願いをしてきたが、ぜひ実現させたい。時ノ寿の森クラブ員の中にも、現役時代の知識や技能を生かして発電機を作ってくれそうな人が1～2人いる。これは面白くなりそうだ。

2011年12月15日(木) 自然が資源

時ノ寿の森の自然は、公共の資源であるという考え方を基本に活動してきたが、アメリカ大陸隣接のインド洋に浮かぶセーシェルという小さな国を今晚TV番組で知った。小さな国土には、石油も鉄も何も資源はないが、かつての大統領は、この国の民の暮らしを成り立たせるための国策として、国土全体の豊かな自然を「ウリ」にしようと、観光政策を打ち立てた。

しかし、この国の観光政策は、観光客を際限なく誘致して際限なく儲けようとする世界の大半の国々とはまったく異なる。観光客を制限して招くというルールを基本に置いている。国の民が暮して行かれるだけの収入があればいいという素晴らしい発想である。ブータン国王の国民総幸福政策とおなじだ。

海に囲まれた小さな島国である日本も、セーシェルと同じ環境である。しかし、日本は、この1世紀の間は自然を破壊しても、近代文明を発展させるという政策を基本にして来た。もはや、基本路線は変更できないだろうが、この1年間に原発安全神話が崩壊したこれか



らの未来は、せめてまだ残された日本の国土の自然を、大切に守っていく政策に転換したいものだ。わが時ノ寿の森クラブは、ふるさとに残る森林を再生させ、豊かな森を未来に引き継ぐことに英知を注ぎたいと思う。